

『夜の寝覚』 形代的愛の行方

——少将と新少将——

八 木 啓 伍

はじめに

『夜の寝覚』は、日本文学の最高峰『源氏物語』に大いなる影響を受け、源氏垂流と称される一群に属すが、その第三部では、主人公の君の克明な深層心理の追究が認められ、高い評価を得ている。源氏垂流のうちでもある種稀有な存在である。

物語冒頭から、男主人公中納言による誤認が発端の愛憎劇が展開され、第三部に至っては、大皇の宮の登場や帝闖入事件、生霊事件などがあり中の君は常に脅かされている。優美な中の君が外的で物理的な暴力の中で、いかに生きてゆくかが丹念に描かれているのである。しかし『寝覚』の暴力はこれだけではない。登場人物さらには物語から、脇役へ、道具的な扱いや意図的な排除のごとき暴力が存在するのである。ここで本作『寝覚』の魅力を提示するならば、王朝物語独特の耽美な世界に、暴力というどす黒い負の要素が渦巻いている不健全さであろう。

さて本稿で扱うのは、「少将」という主人公中の君の乳母子

と、男主人公中納言が九条事件の晩に誤認する「新少将」という受領の娘の、二人の女性である。彼女たちは、脇役でありながら物語の中に深く入り込んでいく。主要人物ではない彼女たちを追っていると、彼女たちがいるからこそ中の君が中の君たりうるのかもしれない、とさえ思われる。よって本稿では主要人物の影に隠れてしまった二人の女性に焦点を当て、本文でその行動を確認しながら追ってゆきたい。

少将登場

『夜の寝覚』には「少将」という人物がよく顔を出す。特に第一部（巻一・二）が顕著である。この少将という女性は行動の仕方が非常に独特で、単なる女房として説明することができない。少将の素性を確かめるべくその登場場面を見てみる。

A 亡くなりにし御乳母の女二人、少将、小弁など、うち代は

りつつ参らせて：

(五四)

少将は、中の君の乳母の娘で、中の君とは乳姉妹として育つた。実妹には小弁という人物もいて、姉妹揃つて中の君のお側去らずの女房として仕えている。少将と小弁は同時に登場したが、すぐにそれぞれ単独行動を開始する。少将の行動が書かれ、小弁の行動が書かれなくなるのである。これは少将に物語の重大事項を担わせることに繋がつてゆく。

中の君の従姉妹でありながら母代わりのような最側近の対の君^註は、九条事件によつて身籠り重篤な状況の中の君の危機を打開せんと宰相中将(中の君の次兄)に事実を打ち明けるべきかを悩んだり、この事件により生まれた中の君の娘石山の姫君の処遇について苦慮したりする。しかし宰相中将に九条事件の真相や詳細を打ち明けることは、ややもすれば父太政大臣をはじめ一家からの不興を買い、太政大臣家における中の君の居場所がなくなりかねない。これはなんとしても避ける必要がある。身内に暴露するということはそれだけの危険を伴うから、対の君としても独断専行し得ない。さらに石山の姫君は公的に祝福される存在ではない。不義の子ゆえ秘密裡に対処されねばならない。そのためすでに真相を知る人物かつ常に身近にいる人物と相談する必要がある。その相談相手こそ少将なのである。「少将と(二人)語らひ合はせ」(一一二、一五一)とあるように、「語らふ」という語が使用されている。この語には単なる「語り合い」のみならず、「実情を語つて、相手を味方に

引き入れる」という意味があり、対の君が少将をいかに重視しているかが窺える。自身よりも力のある人物を頼れない状況で、信頼できるのは御本体中の君の乳母子しかいないのである。

はじめのうちは少将は対の君や小弁と共に登場していたが、ここからは中の君方の面々から離れて、完全なる単独行動を開始する。

B 少将、御佩刀とりて、御送りに参る。中将(＝宰相中将)の、いと忍びて隠るへて思ひ扱ふを、(中納言は)あはれに、うれしとおほして、「さるべきことと言ひながら、(石山の姫君が)はべるは、ただ御徳なり。いかでか、これ、人々しくしなしたてて、見せたてまつらせばや」とのたまひて、いとあはれと、ものをおほし乱れたり。「少将はあの御身近き人」とおほせば、いとなつかしく、放ちがたくおぼされて、「殿に渡りたまふまでは、人少ななるを、誰と知る人あらず、しばし添ひてあれ」と、とめたまふに、我(＝少将)も、(姫君を)いと見捨てたてまつりにくくおぼゆれば、とどまりぬ。児君前に臥せて、あはれなることどもを、よもすがらのたまひ、広沢(にいる大君)には、「四日、物忌さりてしたまふべければ」と、言ひなして、姫君をつと添ひ抱きたまひて、つくづくと見たてまつりたまふ。
(一一五七―一一五八)

石山の姫君は、出生の秘密から中の君側では到底育てられない。折しも中納言の父関白の邸では、中納言の子をいかにしても欲しく、かつて「男は二十歳前に子どもをもうけることが良いのだ。今の今まで子どもがないようなのが、惜しいものだ。たくさん仕える女房のなかにも、中納言の子だと名乗り出るの

があるまいか」^{註3}と両親の関白夫妻が話したという記事が、中宮の会話に見える。この中宮による両親の会話引用にもあるが、中納言の子であれば良いのであり、母親の素性は問わないとわかつて^{註4}いる。そのため中納言は、両親に母親の素性を隠しても問題ないこの状況を利用して、石山の姫君を引き取り父関白邸で育てるのである。そして、中納言が中の君のもとから石山の姫君を連れ出す際、「少将、御佩刀とりて、御送りに参る」とおり、少将が同行するのである。

少将が同行することになる意味があるのかは、これよりのちに明らかにしていこうと思うが、初めの時点では関白邸で石山の姫君が暮らしていく土台づくり、あるいは対の君の代わりとして関白邸の様子を探るような役割が担わされていたのだろう。

石山の姫君を前にして、中納言は姫君の移動に際して奔走してくれた宰相中将や少将に思いを吐露するが、ここに登場しているのは全てが中の君に繋がっている人物である。つまりこの場は、現在中の君と離れ離れの彼にとり、間接的ではあれ中の君の存在を感取できる、至極の空間である。特に中納言が石山の姫君を力強く抱く様子に、父親の慈しみとともに中の君への

強い思慕が窺える。傍線部の「つくづくと見たてまつりたまふ」という彼の眼差しは、石山の姫君を単に見つめているのではなく、その向こうに中の君を透かし見ているに相違ない。

先述のとおり、この空間は全てが中の君に繋がる大事な人物によつて構成されている。そのため、世間的な取り計らいをしてくれた宰相中将に対してもこの上なく有り難い思いを抱いているし、少将に対しても並の女房以上の感情をもつて接している。二重傍線部の中納言に注目すると、少将が中の君のお側去らずの人ゆえに離れたい思いに駆られ、まだ石山の姫君の傍にいるように要求している。「しばし添ひてあれ」という中納言の言は、姫君のために言っているのではない。中の君に繋がる人物が、自身から離れてしまうのを惜しんでのことである。

C 少将帰りなむも、(中納言は)心細くおぼさるれば、「かしこにも、顕証なるべきにもあらず。送りたまへ」とて、率

ておはす。丹波の乳母、御送りに参る。(関白邸の)西の対には、大納言殿^{註5}(中納言の音無し)の窓にしたまへば、そなたの北の渡殿を、乳母の局にしつらはせたまへり。ここに、少将も下ろし据ゑさせたまひて…やがて(姫君が関白夫妻の)御前に臥せさせたまへるを、大納言は見置きたまひて、乳母の局におはして、少将に、あはれなることどもを尽きせずのたまふ。「(中の君に)御文まらせば、心に入れて伝へたてまつりて、御返りかならず申すすめよ。さるべからむ隙には、なほ思ひ構へて、いたくかき絶

えぬさまにを。かくてのみは、さらにえ忍びあふまじ。世に類なく、乱りがはしきやうなりとも、世のもどきをも、人の恨みをも知らず、忍びて取り隠したてまつりてむとのみ思ふを、同じ心に思ひたばかれ」など泣く泣く泣くのためひて、…かたじけなく、(少将を車に)御手づから乗せたまひて、をかしやかなる贈り物、行頼して差し入れさせたまふ。引き出でたるに、見返りたれば、心細げに見送りて、柱に寄りかかりてたちたまひたるを、少将もあはれに見たてまつる。

(一六三—一六六)

これは丹波の乳母(中納言の乳母)の家から、石山の姫君を関白邸に移そうとする中納言が少将の処遇について動きを見せる場面である。既に乳母の家からも中の君のもとに帰そうとはしなかったが、今回更なる移動に際しても中納言は少将を手元に置いておこうとするのである。少将が帰ろうとしても、中納言が「心細く」思う。これに應えて少将はまだ中納言と(姫君と)行動を共にする。関白邸に到着したのち石山の姫君付きの乳母^註の居所が記されるのは良いとして、同じ場所に「少将も下ろし据ゑ」、さらにそこにわざわざ足を運び、二重傍線部「あはれなることどもを尽きせず」言った。そして中納言は中の君への文などをようやくと仕上げて少将に託し、破線部「かたじけなく」も少将を車に「御手づから乗せ」て、「心細げに見送」った。これに対し少将は「あはれに見たてまつ」ったのである。この辺り、少将に焦点が合わされ、それだけ中納言が少

将に対して並々ならぬ思いを抱いているということがわかる。しかしなぜ中納言は少将にこだわるのか。中の君側は少将が中納言方にいた方が、姫君の動向を注視できるのでそのまま遣っておくに越したことはない。そして石山の姫君にはすでに乳母がついてきているのだから、中納言にとっては姫君に関して心配することなどなく、少将を頼る必要はないはずである。

中の君のもとに帰った少将は、しっかりと「日ごろの物語、殿のたまひしことなど」(一六六)を対の君に語り伝える。ここまでくれば、中の君側にとって少将は対の君の目が届かないところの情報を伝達する役回りを与えられたことが明確だが、これだけが少将に与えられた逃れられない最重要課題だとは言えない。

中納言は少将がいる部屋をわざわざ訪れていたが、傍線部「かしこにも、頭証なるべきにもあらず。送りましたまへ」と中納言が少将に言っていた。新全集の訳を借りると「父邸だと、人目に立つわけでもない。(姫君を)送ってきておくれ」(一六三)となる。人目に立たないと中納言は断言しているではないか。ならば少将が、中納言がいる母屋に赴けば良いしそれが筋であるがそうはしない。主人が女房のもとを訪れるというのは、ここに単なる主従関係以上のものがあるのではなからうか。『紫式部日記』に似た例がある。

渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けど、おそろしさに、音もせて明かしたるつとめて、

夜もすがら水鶏よりけになくなくぞまきの戸ぐちにた
たきわびつる

かへし、

ただならしとばかりたたく水鶏ゆゑ開けてはいかにく
やしからまし^{註7}

藤原道長が女房の紫式部を訪れたという非常に短い記述だが、この箇所^{註8}の頭註には「式部が道長の召人であったことの意をも含んでいるのかもしれない」とある。阿部秋生はこれに對して、「戸を開けなかった」という記事を紫式部が何のつもりで日記に残したのかは判然としないが、ここで戸を開けていたら世間的な評価が「召人に落ちる」はずだ、というようなことを述べている。換言すれば、式部が召人であったことをここからは明確に断言しきれないが、この状況はいつ召人と評価されるかはわからないものだ、ということである。では召人とは一体何なのか。阿部の定義づけを参考にする。^{註10}

(1) 自分の家（又は自分の家に準ずる妻の家など）の女房であること。

(2) 主人との関係は、家の内の者には勿論外部の者にも知られているが、いわゆる公然の秘密の類で、その人の前で口に出さぬことになっていたようである。

(3) 北の方格の女性は、そういう女性は一々目に角をたてぬ方がよい。そうすることは、却って北の方の権威を傷つ

けることである。

(4) 実質的には、妻と同じであるが、局住居をしていて、あくまでも女房である。

ということらしい。新全集の頭註、さらに阿部の論を見ても、式部は召人の定義に当てはまる。よって道長と式部は主人と召人の関係にあると判断して差し支えないだろう。

『紫式部日記』に主人と召人の様子を求めてみたが、確かに『寢覚』の中納言と少将とは、主人と召人の関係だと言える要素はある。実際『寢覚』に多分な影響を与えた『源氏』にも主人と召人の関係はある。そこで少将を召人と断定できるのかを検討する。

まず、先に注目した箇所であるが、中納言が少将のいる局（関白邸、西の対北の渡殿）を訪れるに当たり人目を忍んでいる。人目を忍ぶ様子が事細かに書かれているわけではないが、命婦の乳母の居所に隠すように少将を居させたことや、命婦の乳母が座を外している間に密やかに会うことでそう判断される^{註11}。道長と紫式部の例にもあるとおり、表立って女房のもとに行っているのではない。石山の姫君が母屋の関白夫妻のもとでもて囃されている間に、閑散としている西の対でそとと会っているのだ。公然と訪れないのは、少将が中の君の女房だからである。これが大君の女房であれば公然の秘密として周囲の暗黙の了解のもとに判断されるが、中の君の女房であれば自ずと中納言と中の君の関係が浮上してしまう。それゆえ忍ばねばならぬので

ある。

続いて中納言は、二重傍線部「あはれなることどもをも尽きせず」言ったという問題を取り上げる。この「あはれなることども」とは一体何なのか。新全集の頭註には「胸にしみ入るような話を。もとより、大納言（中納言）自身と中の君に関わる事柄（一六四）とある。「胸にしみ入るような話」は確かにそうであろう。中納言にしてみれば、中の君と離れ離れていることを強いられる以上、必然的に中の君絡みの話が出る。また最愛の中の君が産み落とした石山の姫君は、中納言の鍾愛の対象だから姫君絡みの話も当然出る。しかしこれだけだろうか。少将を召人だと疑いだしている我々は、「あはれなることども」と濁された箇所に、中納言から少将に対する何がしかの言葉も含まれていると判断して良からう。同行中少将に対して「なつかしく」思ったり、「放ちがたく」感じたりし、さらには「帰り際に中納言自ら車に乗せてやるという厚遇ぶりであるから、この辺りを中の君への単なる礼儀として終わらせるわけにはいかない。中納言が少将を中の君に代わるものと捉えている端緒と考えると障りはない。さらに少将は「いと若くかたちよき」女房であり、そして何より、生まれたときから中の君と一緒にいた「亡くなりにし御乳母の女」「御乳母子の少将の君」なのだから。

少将は石山の姫君に同行し、丹波の乳母の家、関白邸と転々とした。この同行以降、中納言は全て少将を中の君への窓口と

する。以前は対の君が応対し全てに対処していたが、同行が契機となり、少将は単独で中納言と同じ場面に登場するのである。

D 大納言（＝中納言）、さなめりと心得たまふに、「あなあさましのことどもやおほすに、いとど、憂さにかけて離れゆくは、ことわりかな。いかに見聞き思ふらむ」と思ひやるに、「同じ名にこそあなれ。事は、心やすかるべきさまに構へ語らはむ」とおほして、少将を迎へさせたまふに、さらに参らず。（中納言は）いとど、慰むかたなく、行く方なき心地したまふ。（一七七）

中納言は中の君のもとから少将を呼ぼうとする。中の君と中納言の関係が大君に露見しそうになったためその対応策を考える、という名目で使いを遣るが少将はそれに応じない。そうすると中納言は、「いとど、慰むかたなく、行く方なき心地」がしたらしい。少将が来てくれない絶望がここに表れているが、少将が来てくれないのなら対の君でも良いではないか。しかし対の君にこの要請はしない。あくまで少将にのみし、来てくれない絶望を噛み締めている。少将を中の君の代わりとして考えているのがよくわかる。

中納言が少将を召喚する例はまだある。

E （大君の）なだらかならぬ気色のみ、まさりたまへば、（中納言は）「おほかた、あながちに忍び過ぐして見過ぐすも、

命堪ふまじくのみなりゆくを、同じ名を。心やすく明け暮らさむに、なにの人目か、苦しくもつましくもおぼゆべき」とおほしなりて、少将を、よろづに恨みたまひて、迎へたまふ。さすがに、(中の君が広沢に) 渡りたまふべきほど近くなりにたれば、「なにかは。このたびばかりこそは、限りなれ。姫君をも見たてまつらむ」とて、いといみじくわりなく忍びて、参りたり。(一九一―一九二)

F (中納言は)「姫君は、上(＝関白)の御懷に御殿籠りにければ、今宵は見たてまつるまじかめり。明日ばかりは、かくて」とのたまへど、(少将は)「いま心のどかに」とて、
∴(乳母と)泣く泣く語らひて、帰りぬ。

(一九四―一九五)

中納言不信の大君に手を焼いた中納言が、中の君を連れ出し、同居してしまおうと捨鉢な考えに至り、少将を呼び出す。この時少将は石山の姫君に対面したいから行くのだ、と関白邸に行つた(E傍線部)が、姫君には会えずに帰る羽目になる(F傍線部)。中納言は目当ての少将を呼び出して、中の君に会えない愚痴などを言う。対して少将は当初抱いていた石山の姫君に会う望みは潰え、そのまま帰っている。わざわざ赴き、中納言の邸で忍んで行動しなくてはならない少将なのだから、石山の姫君と目立って会うなど到底できない。ゆえに中納言が対面の場を取り計らってくれても良いわけだが、用が済んだらそれ

までで後のことは気にかけていない。一事が万事の様子がよく表れているし、目当ての少将に会えればそれで良いことが瞭然としている。

召人の少将

中納言はこれまで少将を連れ回したり呼び出したりするだけで、石山の姫君の移動後は、中納言の方から中の君方へ行くことはなかった。しかし父太政大臣のいる広沢に中の君が行くことを中納言に知らせなかつたため、少将を恨み、とうとう雪を冒して広沢に赴く。

G 夕暮に、(中納言は)山里へおはします。∴女房の参ると思はせて、憚りなくやり入れさせて、少将が局へ寄せたまへば、(少将が)うちやすみたるほどに、車をさし寄せれば、すべなしと思へど、かうは、かけても思ひ寄らず。「中将の君といふ人の、久しう参らぬが、今日の雪に誘はれて参りたまへるなむめり」と思ひて、ゐざり出でて、「妹が家路ならねど、分け参りたまへること、浅からず」と言ふを、をかしとおほして、几帳差し出でたるに、暗きほどなれば、下りたまへるに、あきれてものもおぼえず。∴やや久しく待たれて、少将下りて、「入道殿の、今日雪げに風起こらせたたまひて、なやましうしたたまひて、(中の君は)え渡りたまはず」と言ふに、(中納言は)言はむかたな

くあさましく、心憂くて、「にはかに、よも風もおこらせたまはじ。おどろき騒ぎ渡らせたまふこともあらじ。など。さる御言づけなくとも…ありのままに語らばむは、恨みどころなきことわりにて…あらはに、虚言、つきづきしくとりつづけるるかな」と、恨めしげにおぼいたるを、いとほしけれど…言ふかひなし。…(中の君が)いと心細う、今日などがめ暮らさせたまひつる御気色の、見たてまつる人(少将)もやすからぬよしを、これさへ、けはひなつかしくしめやかに、ことわりかなと聞こゆばかりうち言ひて、涙落とす気色、いとことわりなるに、(中納言は)え恨みも果てられず、さすがにいと聞かまほしく、問ひ聞かれて、なになり袖の凍りもやらず、流れ添ふほど、夜中ばかりにもなりぬらむと思ふ。うへより人来て、「式部卿の宮の宰相中将、参らせたまへり…」となむ言ふなり。(少将は)「乱り心地かきくらすやうにはべれば、え上りはべるまじ…」とて、やりつなり。「なぞ。我のみ分けたる雪を…この中将の、かかる夜中に、ふりはへ来つらむよ」とおぼえたまへば、「など、思ひもかけぬほどなる。そも、人がらなれば、(中の君は)これをばあはれに、をかしくきこしめすらむかし」とのたまふ気色、いともものしげなれば、「あな、ゆゆし。なにせむにきこしめし入れむ。かの君は、入道殿に親しう参りたまふ人なれば」ときこゆれば、「それも昼などこそあらめ。かならず、人(中の君)にあはれと心とどめられたてまつらむと、思ひ顔なる、世の

ふりはへざまにこそあめれ」…など、いと心よからぬ気色にて、うち嘆きつつ、つゆもまどろまず、床なかに起き居て明かいたまふ。(二〇八―二一四)

広沢に着いた中納言はまず少将の局に行く。対の君よりも扱いやすい少将から攻めて、中の君へ近づこうという魂胆だ。一方少将は、中納言の来訪は不意のことだったらしく、「中将の君」とかいう中の君に仕える女房の一人が参じたと油断していたので、中納言の出現に呆然とする。この状況を少将一人では対処しきれないということと、中の君に会いたい一心で雪の山道を冒してきた中納言の苦勞を思つてか、少将は対の君に相談する。しかし中の君は父親の風邪を理由に中納言に会おうとはしない。その恨みごとが少将の身一つに降りかかる。

少将に恨みごとを言つたり中の君に想いを馳せたりしている間に、傍線部「夜中ばかりにもな」つてしまった。このまま中納言は中の君に会えない辛さをどんどん募らせる。折しも宮の中将という中納言のライバル的存在の貴公子が、中の君の女房を訪ねてきたことを耳にした中納言は、中の君を狙いに来たと見て狂つたように少将に食つてかかる。疑心暗鬼に陥つた中納言が少将を責めに責めるのである。少将も宮の中将の面子が保たれるように中立の立場で反論するが、中納言には響かず、悶々と夜を過ごし、二重傍線部「うち嘆きつつ、つゆもまどろまず、床なかに起き居て明かいたまふ」とおり、少将の局でそのまま一晚を明かしてしまつたのである。ここで中納言が嘆

いたのは、中の君に会えない辛さや宮の中将への猜疑心から、中の君に会えている最中なら、たとえ宮の中将が来たとして、中の君に懊惱することはなかった。懊惱に苛まれ、手を伸ばせば届くほどの中の君を目の前でお預けを食らっている彼が、これを解消するには少将を捌け口とするより他ない。若く美しい彼女は中の君の乳母子なのだから。そしてここは少将が中納言の召人だと確定するには十分な場面である。

私は、少将は中の君に「代わる存在」だと先述した。無聊をかこつた中納言の手慰みの対象として存在するのである。そのためこの「代わる存在」とは「形代」なのだ。ここで三田村稚子の論考を引用する。

(形代的愛の姿は)女の身分が低く、男が今更、新しいその女なりの良さを発見する気もなく、又、そのような機会さえも与えられず、ただ亡き人を偲ぶよすがとして、男が方便的に遇することのできる地位にある時、起こることなのである。そういう場合、彼女たちは全く道具的に、ただの形代、人形として扱われた。^{註13}

少将は、中の君の乳母子であるというだけで、身分があるわけではない。つまり中納言にとって非常に扱いやすい存在なのだ。三田村論文にある「ただ亡き人を偲ぶよすが」というのは、『寢覚』の場合、中納言がいくら求めても中の君に会えない隔絶が、死の隔絶と同然であるということだ。また中納言は少将

の帰郷の折などに「心細く」思うことがあるから、中納言から少将に向けられた愛は一見存在するようだが、そうではない。中納言が見ているのは実体としては少将でありながら中の君の幻影なのだ。中納言は少将の向こう側に中の君を見ているから、ここに少将への愛などあるはずはない。あるのは中の君を深く思う志のみである。

破線部、いま車を寄せた人物は中将の君という女房だろうと少将は油断して軽口をきく。「妹が家路ならねど、分け参りたまへるこそ、浅からず」と。「妹が家路」の部分は典拠があり、新全集の頭註は『家持集』の「妹が家路忘れめや足引の山かきくもり雪は降るとも」を踏んだ表現^{註14}だとする。校注は『家持集』の同歌を踏まえているとしながらも、もう一首同集から「妹が家路我惑はしつ久方の天霧る雪のなべて降れば」を指摘する。

「妹が家路」という初句が気になる。「妹」といえば言わずと知れた「妹背」の「妹」である。少将は誰かが車を寄せる音を聞いて、それがまさか中納言だとは思っても寄らず、この言葉を投げかけた。だから中納言を意識して「妹が家路」と言ったわけではない。しかし物語はなぜこれらの歌を引いた言葉をわざわざ彼女に言わせたのだろうか。「妹が家路」といえば明らかに「愛しい女の家までの道」となる。単に戯けた感じを出しながら、愛しい中の君のことが含めてあるのかもしれない。しかしこれは、中納言にとり少将が形代として目をかけたいと自然

に思われる存在だからその言葉ではないのか。中の君の乳母子で常日頃そのそばに侍している少将には、関係を持った男が存在することを、物語により自らの口で暗に言わされているのである。

その後の少将

少将は巻二で中納言の召人として存在していることを確定できたが、中間欠巻部の様相はわからない。しかし中の君の乳母子だという事実があり、巻三から巻四にかけて老闕白の忘れ形見の参内に中の君が同伴したときには少将も随行しているから、そのまま中の君に仕えていたと推測できる。^{註15}

第一部で中納言が中の君に近づける機会は無いに等しいが、皆無というわけではなかった。しかし第二部で中の君は公的に老闕白という夫を持つ身となつてしまったため、以前に増して会えない状態が長く続いたはずである。そのため、中納言は中の君を感じるには少将を求めると他なく、彼女は以前と同様の扱い方がなされたと思われる。現存する巻三から巻五（第三部）にかけて、既に中の君の夫老闕白は故人で、帝闕入事件により中納言と中の君は一気に距離を縮め、結果新たな子が生まれ、紆余曲折を経て同居に至る。

少将は巻四・五（三七三、五〇〇）においても側近の女房として自然に登場していたが、中の君の第三子出産を間近に控えた正月の司召で、意外な事実が発覚する。

J そのつごもりの司召に、我（中納言）、右大臣になりたまひて、一の大納言を内大臣になし上げ、くつろげて、大將に新大納言、新中納言、大納言にないて陸奥国の按察使かけさせたまふ。源宰相中將を中納言になして衛門督かけ、前大貳を民部卿になして、権大納言の子の弁少將を右大將に上げて頭になり、少將が下りし尾張守、讃岐になりなど、ただこの御ゆかりの一筋の、世の道理も消ちて喜び榮えたるさまを、「いづれの御世にもいみじの人の御おほえや」と、言ひおどろきたり。（五二一）

中納言は巻一で大納言に、中間欠巻部で左大將に、さらに内大臣となつており、今回巻五で右大臣になった。中納言の他にも中の君の親族が中納言の意向により出世を果たす。そのなかに「少將が下りし尾張守、讃岐になり」と衝撃の事実が紛れている。「紛れる」という動詞が合致するほど、あたかも平然を装うように嵌め込まれているのである。少将はいつの間に尾張守の妻になっていたのか。この「寢覚」という物語は、新全集頭註（五二二）も指摘するように登場人物を簡単に登場・排除させるが、現存本で少將がこれよりのちに登場することはない。しかし少將の結婚が、かように簡素な筆致で済まされているというのはむしろ当然の結果と言えるのではなからうか。少将は中の君の乳母子で女房として仕える傍ら、中の君の形代という役割を担い中納言の召人であった。三田村が「彼女たちは全

く道具的に、ただの形代、人形として扱われた」と述べている
とおり、形代は道具であり人形であり、捌け口である。欲望の
対象（中の君）にゆかりの人物なだけで、存在価値はそれ以上
でもそれ以下でもない。

『源氏』 宇治十帖の主人公・浮舟は、源氏の弟八の宮を父に
持つが、母は父の召人の中将の君という女性だった。北の方を
亡くした八の宮は一人寝の無聊をかこち、女房として仕えてい
た中将の君を共寝の相手とし子を成した。少将は中納言の種こ
そ宿さなかつたものの、中の君に会えないで一人寝の寂しさを
噛み締める中納言の性の捌け口として機能していたことは、
『源氏』の中将の君と何ら変わらぬ。

現在中納言が栄華を極め、本命の中の君と同居できる状態に
なった上からは、かつて中の君に会えず忍び堪え、辛抱に辛抱
を重ねたあの頃ではないのである。つまり中の君もどきに甘ん
ずる必要はなくなつた。本命は眼前に鎮座している。かくなれ
ばかつて欲望を解消した道具はもう要らないため、尾張守の妻
として夫の任国に下らせてしまつても何の問題もないのである。

仮に少将が中納言の召人でなければ、中の君と中納言の同居
後も終生お側付きとして仕えられたかもしれない。しかしその
役目は妹の小弁が担い^{註16}う。少将のように中納言と一対一で描
かれることのなかつた小弁は、召人という役割は負つていな
い。中の君の単なる乳母子であり、単なるお側去らずとして一
生を終えることができる。夫を持つことが女としての幸せかは
別として、少将のように道具として撫で物のような扱いを受け

ずに済んだ小弁は、少なくとも姉少将よりはましな人生だつた
だろう。

少将が実に等閑な筆致でその身の振り方を示されているとい
うのは、召人であり形代であつたからで、あれだけ献身的な働
きぶりがあつても、かく纏められる人物なのである。ゆえに少
将の結婚の時期などはどうでも良く、使つた道具を排除するよ
うに除籍させられた少将という人物の、物語からの評価を確認
できるのが、あのさりげない箇所なのである。

対の君と少将

対の君という人物に先に触れたが、改めて彼女を組上に載せ
少将との差異を示したい。

対の君は、巻一・二では中の君のもとから離れることがない
重要な女房で、伊勢光はこう論じている。

『夜の寝覚』の中で最初に「女」として描かれる：彼女は
叔父の性の相手を務めさせられる、哀しい「女」として登
場するのである。性の相手——。彼女は「男」に迫られ、
求められる自らの「女」性を「恥づかし」「かなし」と否
定的に捉えざるを得ない。対の君は自分が「女」であるこ
とを、喜ばしいこととして捉えられるような人生を送つて
いない。むしろ彼女は「女」としての「恥づかし」さや「か
なし」さを実感させられている。^{註17}

事実、対の君は中の君の父太政大臣の召人だった。太政大臣の北の方で中の君姉妹の母である「故上」は、対の君にとり父方の叔母で、実子同然に養育された過去がある。故上亡き後は太政大臣の召人となりその寵を得たため、既に召人だった大君の乳母（弁の乳母）に目の敵にされたのである。太政大臣の召人となった対の君は、自分自身が愛されないで、故上の形代として遇される境涯を哀しいものと感じていたに違いない。故上の形代としての存在は、先に引用した三田村論文が吻合する。まさに「道具」で「人形」である。自分が性の捌け口として存在しているために、女性の幸せには到底たどり着けない。この哀しさを紛らすために、中の君の母のような役割を担い奔走するのである。

しかし中間欠巻部で、対の君は大宰大弐の妻として筑紫に下っている。先に見た少将ものに尾張守の妻となっていたことと合わせ考えると、用が済んだ召人が別の男に下げ渡されている、という見方ができる。そして対の君が大宰大弐に嫁したのは、おそらく中の君が老閨白の妻となった頃だろう。母という役割が要らなくなったときに、対の君は物語によって排除されたのである。中の君との同居が叶った中納言によって、少将が召人という役割を剥奪されたときと同じように^{註19}。

続いてこの対の君と少将の、物語内での立ち位置を考えてみたい。

対の君は中の君に仕える女房であるが、父太政大臣の召人で

あった。『夜の寢覚』に初めて「女」として登場した事実は肝要で、対の君が女房以上に「女」という存在だったからこそ、弁の乳母に敵視され、哀しい物語を産んだのである。前掲の伊勢論文が指摘するとおり「対の君の物語は中の君のその先蹤として存在している」というくらい重要な女性が対の君である。

対の君は、物語冒頭の九条事件以降、中の君が石山で姫君を出産するまでの間、中納言が中の君側に接触する際の窓口となっている。特に九条事件の別れの朝独断で中納言に歌を詠んだり、事件の真相が知れたときには中納言に事実を明らかにしたり、重大なことは全て対の君が対処していた。中納言は中の君側の人物を対の君しか知らずにいる期間がある程度ある。となれば、中の君に会えない鬱憤を対の君で晴らすことも考えそうであるが、一向にその気配はない。対の君が中の君の形代であつてはいけない理由がそこにありそうである。

まず対の君は中の君の女房である前に、太政大臣の召人であった。しかしこの召人として、叔父の性の相手を強いられることを疎み、実母も乳母も亡くなっていった中の君の世話に徹する決断をした過去を持つ。そして中の君を我が子のように養育するのである。前掲伊勢論文は「対の君は、中の君の「継母」的な側面を持つていた」と言っているが、近い年長の女性に死別している中の君の養育は、乳母や女房としてではなく、「母」として行っていたわけである。これらを踏まえれば、中納言が対の君を中の君の形代としなかつたわけがわかるだろう。一つには眞に当たる太政大臣の召人であつたという事実。

もう一つは中の君の母の役割を負っていたという事実。特に後者は、系図上の母ではないにせよ、一步間違えれば母子姦に陥りうる。また中納言は「母」という存在に非常に弱い。^{註20} 巻二で石山の姫君が生まれた事実を報告するのも、巻四で関白邸から中の君のもとに連れてきた石山の姫君を催促されて早々に連れ帰ってしまうのも、相手は全て彼の母である。母には逆らえないという中納言のマザコン氣質が対の君にも働いたと考えられる。

しかしこれだけではない。対の君は「女」であり「母」であるが、物語の語り手の役割まで負っているのである。これも前掲伊勢論文の指摘だが、「対の君が自分なりに情報収集し、読者の前に開陳していく人物である」こと、さらに「信頼できない語り手」であることを論じていた。真実を全て語る語り手ではなく、一面的な見方しかできない語り手でもあったということだ。中納言は物語と対の君によって送り込まれた少将は食べたが、煮ても焼いても食えそうにない全知的である種不気味な対の君には手が出なかったということである。

新少将登場

話を巻一に戻す。九条事件が起きた際に誤認された女がいる。その人はのちに新少将と呼ばれる。この人物は少将や対の君よりもさらに脇役であり、第一部にしか登場しないが、物語によって人生を入念に考えて入れ込まれた人物である。

九条事件出来の夜、現場にいたのは中の君、対の君、中納言、中納言を引き入れた乳母子の行頼、そして但馬守の三の君（後の新少将）である。彼女は対の君の姪であり、中の君と近しい間柄（従兄の娘）である。ではその初登場を見てみる。

K この夏、但馬守の女、婿取りせむとてかしづくも、あたらしき所に渡すべきも、方のふたがりければ、四十五日違へに、そこ（＝九条の邸）にぞあらせける。（但馬守の娘の）母君まかり通ひ、（中の君や対の君は）よそ人にもあらねば、女（＝但馬守の娘）もやがて御前に参りて、めでたくをかしげなる御様を、明け暮れかくて見ばやと、若き心地には思ひけり。
(二五―二六)

何気ないふうに登場する但馬守の娘は、中納言による誤解で大変な状況に陥ることになる。

中納言は中の君を月夜に垣間見て一気に恋に落ちるが、彼は「但馬守時明の朝臣の女」という行頼の言葉（二七）を鵜呑みにし、中の君その人を但馬守の娘だと思ひ込んで関係を持つ。非常にスキャンダラスな場面である。そして中納言は自らを「宮の中将」だと騙るのだが、女は受領階級の娘だから偽名でも構わないという軽蔑が見え透いている。

性のエネルギー

中納言は、但馬守の娘だと思ひ込んで中の君と關係を持つてしまつた後は、もうその人が忘れられず寝られない。ゆえに姉中宮の女房とし、通いどころにしようと考え。しかし中納言は自分が關係を持つたのが中の君だつたと知らないため、中納言に指名されるのは但馬守の娘である。

中宮に但馬守の娘の出仕を勧めた後、中納言は丁度参内していた宮の中將に迫る（四一〜四七）。「宮の中將の参りたまへるさへ、あはれになつかしくおぼえなりて」と、宮の中將がああ晩の女にゆかりがある（と思ひ込んで）から、彼と話をせずにはいられない。ある種宮の中將が空想上の形代と化していることさえ感じられる。そして中納言は石山での出来事とその後の詳細註21や女性一般について宮の中將を質問責めにしたたり、自身の女性論を述べたりする。宮の中將も饒舌で中納言に聞かれるままに答え、自身の女性論を展開している。新全集の頭註（四七）にもあるが、まさに『源氏』帯木卷の「雨夜の品定め」を小品化したものである。

『源氏』の「雨夜の品定め」といへば、宮中に宿直していた男たちが女性論を展開して、「痴者の物語」などかなり複雑な話で盛り上がることで有名だが、彼らはなぜこんなにも物語する場で盛んになっているのだろうか。それは彼らが本来なら、女のもとに通うような時間帯であるにもかかわらず、内裏から出られず悶々と過ごしているからである。この蓄積された性的

なエネルギーは、彼らが女性論を熱烈に交わすことによつて発散註22されている。

『寝覚』のこの物語する場も、「雨夜の品定め」が基盤にあることもあるし、男が内裏で夜通し女性論に徹するというところで、同じく性のエネルギーの発散がなされていると考えて良い。それに中納言と宮の中將は、女にそれぞれ想いを馳せながら語り合っている。しかし双方の認識としては但馬守の娘に向いている。宮の中將は、石山で実際に会つた但馬守の娘を思いながらしつかりと持論を展開していく。彼としては、一度切れてしまつたとはいへ忘れない娘が別の婚約者をあてがわれ、もう会えなくなつてしまつた後の話なので、完全に切れたと言つてはいても踏ん切りがつけられているわけではない。そうでなければ夜通しの女性論、特に但馬守の娘絡みの話などするはずがない。ゆえに但馬守の娘へと彼の性のエネルギーは向いていると言える。一方中納言は、彼の認識としては但馬守の娘で、宮の中將と同じ方向を向いているようだが、実際にエネルギーを向けているのは中の君なのである。ここに双方の認識の錯綜が見られるが、あの晩の女は但馬守の娘だと信じて疑わない中納言は、内裏でやり場のない感情をねばつくように聞き出し話すことではにか収めているのである。

しかし考えてみると、（中納言の場合は誤認だが）中納言と宮の中將が同一の女性に想いを馳せるのは、『源氏』宇治十帖の匂宮と薫のようでもある。匂宮は宇治に美しい姉妹がいることを薫の話から知り彼女たちの虜になるわけだが、彼らは互い

に模倣しあつて宇治姉妹への恋愛をしている。さらに浮舟という存在も、彼らが互いを意識するがゆえに手に入れたくて躍起になる（もつとも浮舟の場合、薫が中の君に手を出したと疑つた匂宮の復讐という面もあるが^{註23}）。この中納言と宮の中將に置換してみても類似したものが見えてくる。前述したが、九条事件のあつた夜、中納言は行頼の言葉を嚙呑みにして中の君と但馬守の娘を見間違える。そして見間違えたまま関係を持つてしまふわけだが、一般的に考へて太政大臣の娘と受領の娘では、その違いは歴然としている。しかし中納言が行頼の呪縛から逃れられないのは、物語には書かれぬがそれより以前に宮の中將から但馬守の娘の話を聞いていたはずだからである。ゆえにその女性（だとされる人）を目前にしたらその思考から離れられなくなるのは当然である。宮の中將の女なら手を出してみたいとも思はずで、現に美しさに負けて関係を持つてしまつた。さらに宮の中將も物語の場において、中納言を意識した上で但馬守の娘の話を滑らかに述べている。ゆえに、匂宮に中納言、薫に宮の中將を定立することができる。かく考えれば、中納言と宮の中將の但馬守の娘を巡る一譚は、『源氏』の宇治十帖ほど確立したものではないにせよ、匂宮と薫の宇治姉妹の物語と浮舟物語を綯交ぜにしたものとも捉えられる。

新少將出仕

し 参りぬと聞きたまひて、いつしかと御前に召す。…（出仕

した但馬守の娘の様子などが）なほあやしく、おぼつかなさにも、御殿油をすこし明くかかけて、「例の、ある気色ばかりはいかでかは」とて、扇をすこし引きやりたまへば、いとわりなく思ひて、靡きかかれる髪のかかり、そばめ、長押のしもにて琵琶弾きし人に見なしつ。…思ひつるほどは、類なき心のうちながらも、思ひおとしむる方さまにおのづから思ひ紛れ、また、「宮に参りなば、なにのとどこほりもなく、見る目に飽くまで目馴れなむ」と思ふ頼みにこそ、心を慰めつれ、あらざりけりと見なし果てて、行方も知らず、果てもなく、わびしくて、「いかにも、これ離れぬにこそ。しか、これをだになづけ語らひて、その行方をもおのづから知りなむ」と思へば、（中の君では）あらざりけりとて、こよなくも思ひかへされず。

（六四―六五）

但馬守の娘を出仕させることに成功した中納言は、中宮の御前で灯を掲げてその姿を見る。そしてその正体が自分の追い求めていたあの晩の女性ではないことを知る。傍線部のとおり、中宮のもとにいさせられれば、いつでも通いどころにできると思つていたアテが外れたので驚愕しながらも、この女（但馬守の娘）を上手く使つて本命のあの女性（中の君）に近づこうとすぐに切替えをする。しかしこの切替えの早さには、既にこの但馬守の娘を道具として見ていることの端緒が窺える。辿り着けなかつた本命の中の君には、この女を踏み台にして必ず手に

入れようという思いが洋溢しているのである。

ちなみに九条事件のあの晩、誰がどの楽器を弾いていたかは、物語は明示していなかった。しかしここにかけて二重傍線部のように但馬守の娘が琵琶を弾いていたことが示される。中の君の楽器が箏の琴と規定されている以上、琵琶を弾いているのは中の君以外なることは必定で、誤認により中納言と中の君の泥土のような関係に巻き込まれんとする但馬守の娘が、琵琶を弾いているのは所以がありそうである。中の君が姉大君の楽器である琵琶を弾くことが物語冒頭の最も有名な箇所だが、これは新全集の頭註が「天人の教えたのが箏ではなく、日ごろは姉の習う琵琶であることには、姉妹のその後の運命―姉の運命を奪う妹―が暗示されている」(一八)と指摘するとおりである。となれば琵琶には何かさかしまな要素が含まれているということであるから、物語内で曰く付きの琵琶を但馬守の娘が弾くことは、彼女が物語の渦に飲み込まれてゆく必然性が念入りに想定されていたと言えるのである。

M (中納言は) 局にも立ち寄りたまひつつ、「いかに。さぶら

ひつかれぬや。とあれ、かかれ」と、まめやかに教へ、用意したまひつつ：馴れむつれ、心寄せわたりたまふ。：御様、かたちは、めでたくきよらになまめきて、人を、なべては、さらに見入れ馴らしたまはず、気高く、もの遠き御有様に、わざと見入れたまひて、事にふれて、なつかしくおぼしおきてたまふ。世のつねに懸想びたる筋に、はた、

漏らしたまはず、ただあはれなる御心ばへなれば、いとあはれに、若き心地には、おろかならずのみ思ひ知られて、(中納言が) 参りたまはず程経るときは、人知れず、「いかなれば」など、待たれたまふ心もつきにけり。「中納言、さのたまふものを」とて、(但馬守の娘は) 御前許されぬれば、新少将とぞ召さるる。(六六―六八)

中納言は参内する際にはよく但馬守の娘の局を訪れる。そして彼女は中納言の進言により中宮の側近に取り立てられ「新少将」という名を与えられる。これだけ優遇するには、彼女を中の君への踏み台にしたいからである。新全集頭註(六七)にも「御前許す」は、「受領階級出の新参女房にとつては破格の優遇」「信頼の証」とあるように、中納言側が信頼していることを明確にすることで、但馬守の娘に心の余裕を持たせ、中の君への道筋を辿りやすくしようとしているのである。現に中納言が常に目をかけることにより、但馬守の娘は中納言を慕うようになり、中納言が顔を見せなければ、それを心配するようにまでなっている(二重傍線部)。

N 中納言、御宿直なりけるが、例の寢覚めわびて、(新少将

の局に) 立ち寄りたまひたりけるにぞありける。：「その(中の君の) 行方の知らまほしさに、あぢきなく思ひ寄り、宮にも召させしなり。あが君、今宵聞かずは、見ず知らでやみなむ」と、誓ひのたまふ気色：(新少将の) 深くもあ

らぬ若き心地には、いと苦しく、背きがたくおぼえければ、
いといたく思ひわづらひて、とみにも答へぬ気色に、いよ
いよいみじき言を尽くして、今宵にかぎりてむずるよしを
言ひつづけたまふに、…この君にうちすてられたてまつら
むいとほしさは、身にしみければ、いたくうち嘆きて

「漕ぎかへりおなじ湊に寄る船のなごさはそれと知ら
ずやありつる

御かよひの関は遠からぬほどながら、おぼつかなくおぼし
めしつらむ」とばかり答へたるを、心得るぞ、なかなかお
ぼつかなかりつるよりも、あさましきや。(七〇〜七三)

とうとう新少将にあの晩の女の正体(中の君)を吐かせるこ
とに成功した中納言だが、傍線部はまさに脅迫である。新少将
は親の但馬守が決めた弁少将という婚約者がいたにもかかわら
ず、中納言のわがままから出仕を決断したので。そのためここ
で中納言からの支援や世話が無くなつたら、後宮での新少将の
立場は一気に危ういものとなる。それは何としても避けたいと
思う心を逆手に取つた中納言のやり口である。

そして二重傍線部のとおり、中納言は新少将の局に夜も赴い
ている。度々中納言の訪れがあると物語も記してはいたが、こ
こで初めて夜の来訪が示され、男女関係が明らかになつたので
ある。いわば新少将は中の君の形代である。中納言が新少将に
親しくするのは、忘れられない御本体中の君に物理的に近づく
ためであり、加えて中の君に会えない寂しさや鬱憤を彼女で晴

らすためである。

さらにこの新少将を中の君の形代と位置付ける要素には、中
の君との血縁がある。新少将からしたら中の君は父及び叔母の
従妹である。やや遠縁とも思うが、中納言にしてみれば印象的
で衝撃的なあの晩に同じ空間にいた人物でもあるから、かなり
強烈なゆかりを感じるに違いない。となれば新少将は、中納言
が中の君を追い求める間の、性の捌け口として機能していたと
言えるのである。

さらに重要なことに、この新少将は中の君の正体を中納言に
白状したのを最後にして、物語には顔を出さない。巻五に至つ
て中の君と中納言の会話に一度出てくるが、それは過去(新少
将が中宮に出仕した頃)を回想する形であり、再登場として計
上できない。中の君の身代わりのように登場して、そのまま中
納言と関係を持つがそこに愛はなく、欲望の解消にただ使われ
るといっただけで、中の君の正体が割れば用済みと言わんばか
りに抹消される。これらを踏まえると、新少将は真正正銘の形
代で、前掲の三田村論文にあるとおり、正に「道具」「人形」
であつてそれ以上でもそれ以下でもないのである。しかし新少
将は形代であつても召人ではない。新少将の居場所が問題とな
る。阿部秋生が、召人は「自分の家(又は自分の家に準ずる妻
の家など)の女房であること」が前提だと説いていた。新少将
は中納言の自邸にも大君の邸にも住んでいない。さらに言え
ば、中の君のもとにも住んでいない。ゆえに単なる慰み物で、
道具かつ身代わりであり、中納言の召人にはなれなかつた形代

である。

もし新少将が中の君の正体を白状しなければ、中納言と切れずにそのまま関係を維持できたかもしれないと考えたくなる。しかし九条事件の現場にいたことを中納言に見定められてしまっている限り、中の君の存在を告白するより他なく、初登場時から彼女の存在は道具でしかなかったのである。

「少将」という名称 結びを兼ねて

主人公中の君の乳母子の少将。そして新少将。どちらも「少将」という名である。彼女たちは中の君に会えない中納言によつて撫で物のごとく扱われる存在であつた。そして二人とも物語から忽然と消えた。道具を持ち出すように登場させ、道具を片付けるように存在を消されたが、この二人の名前は偶然の一致だろうか。

乳母子の少将は、初登場時（五四）から「少将」を名乗つていて、物語を通して名前を変えない。一方新少将は、初登場時（二五・二七）は「但馬守（時明の朝臣）の女」と記され、中宮に出仕した後に「新少将」と呼ばれるようになる。

普通女房名は、父兄・夫の官職やその任地などに由来する。乳母子の少将の場合、妹の小弁同様父兄も夫も登場しないので由来はわからない（もつとも巻五に至つて尾張守の妻になつているが）。そして新少将は、親は但馬守、兄は右近将監、二人の姉の夫はそれぞれ右中弁、藏人少納言であり、「少将」はい

ない。^{註26}とすれば、彼女たちは物語によつて意図的に同名を名乗らされているのではないだろうか。この『夜の寝覚』という物語が、「少将」というコードを用いて、中納言にとつての中の君の形代たる人物を定めているのである。三田村雅子の論考を引用してみよう。

幻巻での中将の君は、…あの葵巻で語られた中将の君と同一人であろうか。年齢的に見れば、明らかに矛盾があつて、葵巻で年頃だつた中将の君がそのままずっと仕えていたとしたら、中年女になつてはいるはずで、葵の日のあの艶やかな容姿とは重ならないのである。これを別人と考えることもできるが、今はその必要がないであろう。中将の君という存在は、一人の女としての歴史的、時間的存在さえ、認められない召人の代名詞であるから。ただ形代として都合のよい面がその都度、その都度付加されるだけの人物と言つてよいであろう。^{註27}

『源氏』には葵巻と幻巻に中将の君という源氏の召人が二人登場するが、彼女たちは源氏の妻葵の上と、紫の上の女房であり形代であつた。^{註28}三田村論文は両巻の中将の君が同一人物か否かは問題としておらず、「中将の君」というコードが『源氏』内で召人の代名詞であり、形代としての役割を物語が恣意的に付加してゆく存在だと規定している。

『寝覚』も、少将と新少将は別人だが、同様の考え方でその

名称問題を解決できる。少将は中納言の召人として、物語から与えられた中の君の形代という最重要課題をこなしていった。そして消えてゆく。少将の登場後に命名された新少将は中納言の召人ではないが、中納言と男女の関係を持ち、形代として扱われていた。そして消えてゆく。少将も新少将も、物語と他の登場人物から「ただの形代として都合のよい面がその都度、その都度付加されるだけの人物」なのである。だから同じ「少将」というコードで、同様の道具的人生を歩んで行ったのである。名前によって生き方を限定された女性がまさしく少将であり、新少将であった。

註

- 1 『夜の寢覚』本文で、主人公中の君や男主人公中納言等、主要人物が時として名称を変えることがあるが、本稿では原則として初登場時の名称を使い続ける。
- 2 対の君については後段で少将との差異を示す。
- 3 新全集九六頁に、「二十がうちにまうけつるこそよけれ。今まで子をまうけざるが口惜しきなり。ここらさぶらふ女房のなかに、中納言子と名のり出づるがあるまじき」と関白夫妻が言つたらしいことが、中宮によって語られている。また同六三頁にも、「いかなる海人の子のもとにありとも、中納言子と名のりくる者あらば、と願いおぼすに……」という但馬守が関白夫妻の様子を話した言葉もある。
- 4 このあたり、母親の素性にこだわらない点と子どもの所有権に於いて、母系制から父系制への遷移が見られると神田龍身氏は『夜の寢覚』の勉強会(二〇二一年)にて指摘している。
- 5 新全集九七頁で、「司召に、大納言になりたまひぬ。」とて中納言は大納言に昇進している。昇進して大納言となつていても本稿では「中納言」で通す。
- 6 石山の姫君についている乳母は、巻五に至つて「命婦の乳母」という呼称を物語から与えられる。
- 7 小学館『日本古典文学全集』和泉式部日記、紫式部日記ほか(藤岡忠美、中野幸一ほか、小学館、一九九四年)二一四～二一五頁
- 8 註7と同書、二一五頁
- 9 阿部秋生「召人」について(『日本文学』五卷九号・日本文学協会・一九五六年九月)
- 10 阿部秋生前掲「召人」について
- 11 新全集一五一頁頭註に(「命婦の乳母は、大納言(中納言)と中の君の仲についても事情を承知しているようだ」という記述があった。
- 12 「さて、少将、からくなむ。渡りぬるとばかりは告げよかし。ことわりながら、あまりたたくも、我を放たるかな」と、恨めしきにも……(二〇四頁)とある。
- 13 三田村雅子「源氏物語における〈形代〉」(『源氏物語 感覚の論理』所収、有精堂出版・一九九六年)。三田村は、

- 『源氏物語』葵巻で、葵の上没後中納言の君と中務の君、さらに幻巻で紫の上没後で中将の君と中納言の君という召人的存在が目立つこと、を述べている。彼女たちはそれぞれ、葵の上・紫の上に仕えた女房であり、源氏は二人の妻が亡くなった後源氏は彼女たちに亡き妻の幻影を求めたと指摘している。
- 14 石川徹『校注夜半の寢覚』（武威野書院・一九八一年）一一三頁参照。
- 15 一方対の君は、中間欠巻部で大宰大貳の妻となつており、巻三に至ると中の君の側にはいない。
- 16 小弁が中の君に仕え尽くしたという記事はないため可能性を示すに留める。
- 17 伊勢光「対の君論（上下）」（『夜の寢覚』から物語文学史）所収、新典社・二〇二〇年）
- 18 三田村雅子前掲「源氏物語における〈形代〉」
- 19 対の君は第三部で「大貳の北の方」として再登場を果たすが、これは彼女に宮中において老閑白の忘れ形見・内侍督の世話をさせるといふ役割ができたからであり、一度排除させられた少将も末尾欠巻部で何らかの役割のために再登場を果たす可能性はある。欠巻部を明らかにできないことが惜しい。
- 20 中納言は、女性関係などの難儀が起こるとすぐに姉の宮中に相談するが、彼は姉を全てを包み込んでくれる「母」的存在と捉えていると推測される部分が間間ある。これ
- 21 も一緒に考えてよからう。
- 22 宮の中将と新少将はかつて石山で逢い、手紙の応酬があったことが行頼の言葉でわかる（二七七）。
- 23 「雨夜の品定め」の性のエネルギー等々は、神田龍身氏の二〇二〇年度日本文学演習及び二〇二一年度日本文学講義Ⅱでの指摘である。また神田龍身「堤中納言物語」の一篇『このついで』にみる物語批評」（『国語と国文学』九八巻一号・二〇二一年一月・明治書院）に示唆を受けた。
- 24 『源氏物語』宇治十帖に関しては、神田龍身前掲書が詳細に指摘している。
- 25 音楽譚に関しては、永井和子「寢覚物語の冒頭―中の君と音楽―」（『続寢覚物語の研究』）所収、笠間書院・一九九〇年）に示唆を受けた。
- 26 新全集五〇三頁（中の君が）「いなや、旅寝の夢を思ひ合はするまではひとりあらむとおぼさざりける浅さに、さまざまなりける乱れとこそおほゆれ」と、うち笑みて、うらもなく言ひ出でたまひたるなつかしさに、我（中納言）も笑まれて、「それは、時明が女と思ひて、宮に少将（＝新少将）をば召させしぞかし。さて見むと思ひしは、浅かりけりや」とのたまへば：
- 27 新少将には宮の中将に通われていた過去と、親の意向で弁少将と婚約するも中宮への出仕のために解消した過去がある。元婚約者の名が由来しそうではあるが、すでに

切れているため考えにくい。

27 三田村雅子前掲「源氏物語における〈形代〉」

28 更に言えば、浮舟の母中将の君も八宮の召人であったことも忘れずにいたい。千野裕子は『女房たちの王朝物語論（青土社、二〇一七年）』で、『源氏』の女房たちはその名によってある一定の造形がなされていると指摘し、中将、右近、侍従の三人を特に詳述している。『源氏』の続篇世界でこの名を持つ女たちは、正篇世界の造形を引き継いだ上で存在するのである。

本文引用は新編日本古典文学全集『夜の寝覚』（鈴木一雄校注、訳）により、引用末尾の（ ）はその該当箇所を示す。また適宜私に主語、傍線等を付す。